**説教20230611ローマ4：13-18マタイ9：9-13「主よ、憐れみを」**

**今日は、先ず交読詩編で皆さんで唱和しました詩編７３編を見て参りましょう。詩編73編の登場人物は主に二人です。一人目は、この詩の作者であるアサフ、、彼は音楽家であり、神の宮で音楽を司る者たちの一人でありました。**

**そして二人目は安泰に暮らし、苦しみを知らず体が肥えている人です。この二人目の人は名前はわかりませんが、とにかく傲慢であり、驕り高ぶって、心の中は悪だくみで満ち溢れている人物として描かれています。**

**私たちは、この詩編をさらっと読んでしまいますと、アサフは神に愛されている善い人、二人目の体が肥えている人は神に逆らう悪い人という様に、単純化して読んでしまいがちですが、ことはそんなに簡単ではないようです。**

**この体が肥えている人は、この詩編では一方的に悪い人のように歌われていますが、敢えて言えばそれは本当のことなのでしょうか。彼は本当に、神に逆らうものであり、傲慢を首飾りとし、不法の衣をまとった、心に悪だくみを溢れさす人物であったかのでしょうか。私がそんな風に少々疑問に思うのは、これらの評価が、アサフからなされた一方的な見方に過ぎないからです。ただアサフがこの体が肥えている人を見て、彼のことをとやかく非難しているにすぎないからです。**

**こういうことは世間を見渡せばよく起こっている事でもありましょう。例えば、坊主憎けりゃまで憎いという言い回しがあります。これは坊主に一度憎しみをもった者は、その坊主が着けている袈裟まで憎くなるということで、憎んでいる人の気持ちというものが、果てしなく深まり広まっていく事の喩えであります。**

**さて、このアサフ自身も、自分がこの体が肥えている人を見て、色々と悪いことをあげつらっているということ自体が、実は嫉妬によるよからぬ行いであるということを認めています。**

**詩編73編３節**

**神に逆らう者の安泰を見て　わたしはる者をうらやんだ。**

**この様にアサフは告白をして、自分の感情が嫉妬と言う悪い感情に動かされているということを告白しているのです。**

**私たちは、この嫉妬という感情に取り付かれることによって、イエス様の道から、簡単に足を滑らせて踏み外してしまう、実に弱くて滑りやすい者たちであります。**

**私たち人間は、かつて嫉妬心によって、全く罪がないイエス様に罪を着せて、十字架に付けてしまいました。でも、そのイエス様が、復活をされて、私たちのその罪を見逃して下さって、それどころか、世の終わりまで共にいると言って下さり、私たちを永遠の祝福へと招いて下さったのです。アサフもまたこのようにイエス様の救いに招かれた一人であります。**

**詩編73編 22節から**

**わたしは愚かで知識がなく　あなたに対して獣のようにふるまっていた。あなたがわたしの右の手を取ってくださるので　常にわたしは御もとにとどまることができる。**

**イエス様は、このように、嫉妬心によってイエス様の救い道から滑り落ちようとしているアサフの手をとって、引き上げて下さって、再びイエス様の道へと連れ戻して下さったのであります。そして、それからアサフは益々、イエス様の身元に留まる者とされ、インマヌエルの神イエス様と共に、いつも歩まされる者へと変えられたのです。アサフの歌を聴きましょう。**

**地上であなたを愛していなければ／天で誰がわたしを助けてくれようか。**

**わたしの肉もわたしの心も朽ちるであろうが／神はとこしえにわたしの心の岩／わたしに与えられた分。**

**見よ、あなたから遠ざかる者は滅びる。御もとから迷い去る者をあなたは絶たれる。**

**わたしは、神に近くあることを幸いとし／主なる神に避けどころを置く。わたしは御業をことごとく語り伝えよう。**

**アサフは何千年も前の人でありながら、この詩は、現代でキリストを信じるクリスチャンの歌の様に響いて来ます。この様に、信仰ということは、その人の心のうちに宿って、まとわりついて、常に離れないことであり、また人間全体から見ても、最初から最後まで変わることがないことなのです。**

**では、今日の聖書箇所を見て参りましょう。**

**マタイによる福音書9章 9節**

**イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。**

**このマタイという人は、マタイ福音書の作者であるとされていますが、この人は、当時のユダヤの国を支配したローマ帝国のために、ユダヤの人々から税を取り立てる役目の徴税人の一人でありました。マタイが、体が肥えた人だったかどうかは記されていないのでわかりませんが、とにかく仕事柄、お金には恵まれて、物質的には豊かな暮らしをしていた人であったことでしょう。しかしながら、その仕事が、ローマ帝国の支配の片棒を担ぎ、ユダヤの人々からお金を取り立てるという仕事であったことから、周りのユダヤ人たちから大いに嫌われる立場にあった人たちでした。ここで思い起こされるのが、先ほどの詩編73編で出てきた体が肥えた人のことです。この人物も周りの人々から嫉妬されて、神に逆らっていると言われ、心の中は悪だくみに溢れてると非難されていた人物だったのでしょうが、マタイも、周りの人たちからそのような見方をされていた人の一人でありました。**

**実際、徴税人の中には、お金が受け渡される過程において、不法にそのお金の一部を自分の懐へと入れてしまうという、実際に悪事を働く人も多かったと歴史の記録には残されています。**

**しかし、マタイという人は、その悪から離れ去った人であります。彼はどのように悪から離れ去ったかと言いますと、イエス様が通りがかりに「わたしに従いなさい」と声を掛けてくれたので、彼は何も思案することなく、さっさとそれまで座っていた収税所から立ち上がって、そこを後にしてイエスに従ったのでした。**

**私たちは、自分に絡みついて来る悪や罪から逃れるには、このマタイの様に、何も考えることなく、その悪や罪からさっさと離れ去って、イエス様のほうへとついていく事が最善の道であることが知らされます。**

**ところが、周りの人は決してそのような観方はしませんでした。**

**イエス様が、ついてきたマタイなどの徴税人たちや罪人たちと食事を共にしているのを見て、ファリサイ派の人々は、イエスの弟子たちに「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言いました。イエスはこれを聞いて言われました。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」**

**ファリサイ派は、ここでマタイなどの徴税人や罪人が悪であると決めつけています。そして自分たちのことは正しい人であると決めつけて、揺らぐことがないのです。この様なファリサイ派の頑なな心が、人々の間にいさかいを巻き起こし、憎しみや怒りを生じさせてしまうことは普通に考えて想像に難くないことでしょう。**

**イエス様はさらに言いました。**

**「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」**

**一体、人が最初から最後まで悪であり続けたり、また逆に、最初から最後まで善であり続けるということがあるでしょうか。ファリサイ派という人々はそんな疑問を持つこともなく、当然のように自分たちこそ善であり続け、徴税人や罪人は最後まで悪であり続けるという思い込みを持った、或る意味、おめでたい人であったと言えるでしょう。しかしそのようなファリサイ派の人々の思い込みが、当時の社会を、人々がいけにえを要求し合い、非難しあうといった、実に不幸な社会にしていたことは事実であります。**

**イエス様が引用して言われたホセア書６章６節は大変有名な御言葉であります。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』**

**イエス様は、人々がいけにえを要求し合い、非難し合っている、当時の不幸な社会のありさまをつぶさに見ておられました。**

**マタイによる福音書9章 36節**

**また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。**

**この様に、イエス様は当時の社会において、人々が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれたのであります。つまり、イエス様は、人々がいけにえを要求し合い、非難し合っている中にやって来られて、イエス様に憐れみを乞う準備が出来ているこれぞという人達に順次、声を掛けられて、私について来なさいと言って、人々を憐みの世界へと招いていて下さるのです。**

**マタイと言い、冒頭のアサフと言い、この様にイエス様に声かけられて、イエス様の憐みの世界へ入れられた、私たちの先達であります。**

**さて、私たちの信仰の父は、アブラハムであり、私たちは信仰によって、アブラハムの子孫とされています。現代のクリスチャンもマタイもアサフも、アブラハムと同じキリスト信仰に入れられています。この様に信仰を同じくする信仰によって、私たちは、世界を受け継ぐ者とされたのです。**

**アブラハムと言いますと、なんと偉大で私たちの手に届かない人であるかと、私たちは思いがちでありますが、聖書からアブラハムの信仰の歩みをつぶさに見て参りますと、彼もまた、弱くて打ちひしがれた一人の人間に過ぎなかったことがわかります。そんな彼が、人生の最初から最後まで、憐れみを求め、拠り所としたのが主なる神でありました。**

**アブラハムのはウルと言うところで偶像崇拝をする家庭に生まれ育ちましたが、或る時、主なる神の声を聞きその声に従って、カナン地方へと旅立ちました。**

**「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。」この主なる神の声に従って、彼は旅立ったわけですが、そんな彼に、カナン地方に縁者がいたわけでもなく、物質的な補償があったわけでもないのに、彼はただ主なる神の声による約束だけを頼りに旅立ったのでした。つまり、アブラハムは主なる神を信じたのでした。そして主なる神はその信仰を見て、アブラハムを義と認め、最後まで正しく導くことにされたのでした。しかしながら、それによってアブラハムの人生が、安泰に暮らせるものとされたという訳では決してありませんでした。**

**晩年のアブラハムは次の様に、主なる神に対して嘆いています。**

**「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」このようにアブラハムは年をとっても実の子が与えられない身の上を、当時の社会に在って絶望的になって神に向かって嘆いているのです。しかし、それでも神を離れることなく信仰を保ったアブラハムに対して、主なる神は言われました。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」**

**イエス様の道は滑りやすく、御言葉を信じられないゆえに、私たちはその道から反れてしまう弱い者たちであります。私たちは、自分たちが最後まで、病人であり罪人であることを自覚しながら、だからこそイエス様の右の手によって引き寄せられ、救われる者たちでありたいと祈り願います。**

**祈り**

**父なる神**

**神よ、この世の社会は、人と人とがいけにえを求め合うような、厳しい社会となっています。そんな中にあって、私たちは、打ちひしがれて嘆き悲しんでいます。どうかあなたの御子によって、そんな私たちを憐れんで下さい。上を見上げてあなたに従って歩む私たちに右手を差し伸べて、その都度、苦難からお救い下さい。**

**憐れみも慈しみもあなたのものです。それを作り出すことが出来ない私たちの内に、あなたがいつも住んでいて下さって、私たちが絶望に陥ることがないように励まし導いて下さい。**

**この１週間、あなたが私たちを守って下さったことを覚え、あなたに感謝と賛美を捧げます。今日からの新しい一週間も、私たちを守り導いて下さい。**

**地上であなたを愛していなければ／天で誰がわたしを助けてくれようか。**

**わたしの肉もわたしの心も朽ちるであろうが／神はとこしえにわたしの心の岩／わたしに与えられた分。**

**どうか私たちがあなたを愛するように、隣人を愛することが出来ますよう、私たちを日々つくり変えて下さい。**

**父と聖霊と共に**